



いんたーふえいす

衣玖矢曇

どこまでが私なのだろう
いつまで私でいられるのだろう
私の個としての存在証明は誰がするのだろう
その答えを持ち得る者は、宗教でも哲学でも科学でもない
それは確かだ

僕は、夜の住宅街を歩いていた。
季節は春、しかし、夜風の心地よさは、感じなかった。
それは、もう1時間程で天気が下り坂になる徴候を夜風が含んでいたからだ。
時折、人とすれ違う。
ジョギングウェアを着た中年の女性の確率が高い。
彼らは、腕を大げさに振り、真剣な眼差しをしている。
そして、首元にはタオルを巻いている。
ジョギングくらい気楽にやればいいのに僕はいつも思う。
まあ、当然、思うだけに留めている。

夜の散歩自体は、数ヶ月前より始めた。
始めたばかりの頃は良かったとつい最近よく懐かしんでしまう。
その頃は、まだ夜風は冷たく、頬に鋭角の撫で傷を作ってくれた。
その寒さでジョギングをしている人もいなかった。
安っぽい言葉で言えば、夜の住宅街には僕しかいないのではないかと思えた程だ。
全てが停止している、そんな感覚を楽しむこともできた。
それも春先となると楽しめなくなった。
全てが動き出している、夜にもかかわらず、エネルギーを感じた。
普通の人であれば、事象の起点の雰囲気というのは好意的に受け止めるのだろう。
なにかが始まろうとしている、それはワクワクとした気分を起こさせる。
そう、一般的には。
だけど、僕は違う。
僕は、終焉や停滞に美しさと価値を見出す。
何故かは知らない。
それを自問自答するつもりもない。

自己言及を一頻り終えたところで、僕は、緩やかな坂道を登っていた。

坂の頂上から二人分の影が見えた。

坂の向こうは市街だ。

市街の下品なライトを背に二人分だと判断できた。

でも、性別まではわからなかった。

僕は絶望的に目が悪い。

ことさら、夜となると網膜の光吸収率が落ちる。

正直、夜の散歩となると、治安以外の意味でなかなか覚悟のいる享樂である。

声が聞こえた。

「～でさあ、学校で・・・ あったんだよ。」 甘ったるい声だと感じた。

「へえ・・・」興味のない返事だと感じた。

どうやら、男女のようらしい。

おそらく、親しい中なのだろう。

二人と僕の距離が相対的な速さの分だけ近くなる。

すれ違う。

一瞬、鼻をくすむ人間の匂い。

いや、生きている者の匂いというべきか。

つらい。

せっかく買った真っ白なキャンバスに僅かな黒いシミを見つけるようなそんな感覚。

無音の世界を享受する者にとって許しがたいノイズ。

敵意こそ向けないが、悲しみに似た何かはどこからか沸き上がってくる。

坂の頂上のベンチ。

そこで、一息着く、それが夜の散歩の醍醐味であり、目的でもある。

何かが空虚な心の空間に拡散していく。

心は再び静的な平衡を取り戻しつつあった。

もうすぐ、坂の頂上。

折り曲げられたスプーンのような街灯が僕を頂上へ誘う。

1本だけではない、坂に沿ってたくさんある街灯が僕を導く。

あと少しで頂上。

そこのベンチに座りたい。

思考は完全にハング・アップしそうだった。

そうベンチに座るということだけに。

頂上に着いた。

市街の欲に満ちた人工の光が色鮮やかに溢れる。

ああ、僕のベンチ・・・。

実際はただの公共物なのだけれど、感覚としては僕のものだった。

．．．！

僕のベンチには、誰かが座っていた。

女の人が座っていた。

市街のライトが逆光になり、性別は判断できないはずだった。

でも、女の人だとわかった。

わかった理由は視覚、嗅覚、聴覚、味覚、触覚どのセンシングから来た情報でもない。

それでも、女の人だとわかったし、疑う余地のなさが感じられた。

僕は、ベンチへ一歩踏み出す。

そして、面倒くさいことになるかと直感した。

教えてくれ。

私は、生への渴望と死への落胆で吐瀉しそうだ。

何一つわかっていないにもかかわらず、何故、平然と過ごしていける。

目を閉じ、耳を塞ぎ、口をつむぎ、日々を偽っているというのか。

ならば、それをどうして生きていると言えようか。

僕は、ベンチへ近づく。

今まで、散歩をしてきて、ベンチに座れなかったことなどなかった。

だからこそ、誰が座っていようとも座りたかった。

普段の僕なら、遠慮して座らないだろう。

でも、日課の作業を女の人が座っているからと言って、あきらめるわけにもいかない。

決まったルーチンワークをしないのは、絶対的に嫌だ。

そうじゃないと、壊れそうで。

世界が回らないような気がして。

もっと悪いことが起こりそうで。

自分でもわかってる、自己脅迫にも似た何かが私を襲っていることを。

ベンチへ一歩一歩近づく。

心臓の鼓は拍動を繰り返す。

しかし、その拍動は等速ではなく、明らかに加速している。

加速する拍動、生体循環流体の圧力も上がる。

圧力が上がった流体は、信号伝達させる能力も上げている。

それは、四肢からの情報をよどみなく、頭部の演算処理ユニットへ伝える。

足からは、砂利の接地圧情報が。

手からは、手汗をかいていることが。

つばを飲み込む。

市街からの光が、彼女の真黒のシルエットを浮き立たせる。

その白と黒のコントラストは迷いがなかった。

迷いのない、美しさが僕を威圧する。

その美しさは、僕を誘っているようにも感じられた。

色欲的な誘いではなく、絶対の勝利を確信をしている者が勝負を楽しむ誘いである。

確信している者とは、彼女だ。

僕はどんどんベンチへ歩む。

なのに、一度として彼女は振り向かない。

こんな深夜に一人、ベンチに座っている。

そんな危ない状況で、後ろからの砂利を踏む足音に身動き一つすらしない。

怖くて、振り向けないのか、いやそうではない。

体の震えすらない。

まったく予測を裏切る彼女のリアクションに、いや正確にはリ-アクションしていないのだが、僕のほうが恐怖を感じる。

怖い。

とても怖い。

ああああああああああああああああああ、怖い。

ベンチの真横に並んだ。

視線だけ、彼女の方へ向ける。

背が真っ直ぐ伸び、両手がおヘソのところできれいに折りたたまれていた。

視線を上へ向ける。

少しずつ少しずつゆっくりとゆっくりと。

その視線の移動中に思った。

ああ、どう考えても、僕、不審者だ。

どうしてそれを価値のあるものだと思うのか。

証明は行われていない。

保証されないことを恐れているのではない。

例えば、沼の上に家を建てるという暴挙をやっている可能性があることを指摘しているのだ。

それでもなお、その価値を疑わないならもう何も言うことはない。

君はそれが虚によって作られたものだとわかってても信じ続けるのだね。

その存在を肯定するという積極的な意思表示。

信じるというのはかくも厄介な概念だよ。

もう一度言おう、愛 なんてものは存在しないと思うんだけど。

不審者に間違えられても僕のベンチをこの時間に専有することは許せない。

さらにゆっくりと近づく。

突然、彼女が横を向いた。

「・・・っ！！」 よくわからない声が僕から出る。

彼女の顔の右側は、街の夜光を反射している。

その瞳には、ビビッドな夜の光と深く澄んだ黒を同居させていた。

息が出来ない。

でも、不思議と苦しくない。

そして、ポツンと思う。

人ってこんなに綺麗な造作(ぞうさく)をしていたっけ。

「なんで半年以上もかかっているわけ？」声が聞こえた。

彼女の口が動いているから、彼女が喋ったんだろう。

透明感のある美しい声、それでいて明瞭感がはっきりとして脳へ直接入ってくる。

心地良い。

「え、・・・なんのこ、」僕は彼女の問いかけに正直に答えようとした。

答えようしたのだけれど、精一杯、正直に、正確に。

言い終わらないうちにいきなり後ろにぐんっと引っ張られたような気がした。

気がしたというのは、ほんの数秒のうちに、たくさんのことが起きて僕の脳が状況の理解を行え

なかったことが原因だ。

だから、情報を再構築して推測するしかなかった。

僕は、ベッドの上にいる。

見知らぬベッドではなく、僕が一日の1/4以上を過ごす場所だ。

おかしい。

夢という結論は思考停止に陥っているようで嫌だ。

でも、記憶を辿っても確かな情報を得られなかった。

あまり、記憶を参照し過ぎると情報を生成するくらいが僕にはあるので程々でやめておかないといけない。

ふと、よこの時計に目をやる。

どうやらもう学校へ行く時間のようだ。

朝御飯を食べる習慣が無いことに感謝せねば。

僕は身支度をして家を出た。

学校からの帰り道。

空の様子は群青から優しさを内包したような橙色になっていた。

なんだか、すれ違う人たちにも余裕が感じられる気がした。

学生だったら学校が終わった安堵感、働いている人だったら会社なり仕事なりが終わった安心感といったところか。

無理矢理な理解をしているなと自分でも思う。

それはそうと、昨日のことは何だったのだろうか。

僕は一人暮らしだから昨日どうやって家まで帰ってきたのか聞く人もいない。

はて、アルコールの摂取の記録など一ヶ月前が最新だ。

そもそも、アルコールで記憶が飛ぶという事象事態に僕は懐疑的な立場を取るのだけれども。

「やっぱり夢なのか、」おおっと思考が口に出てしまう。

夕食を済ませ、ニュースサイトを巡回した後僕は夜のジョギングに出た。

冬程の静寂さはなくなっているなど感じる。

そうそう、昨日もこの感想を持ったと思い出す。

高台の公園へ伸びる坂道、スプーンが折り曲がったような街灯。

昨日と同じ景色だ、当たり前だ。

変わっていたらそれこそ恐怖だ。

僕は坂道を上る。

何故だろう、昨日よりは足取りが軽い気がする。

そう思っていたのだけれど、公園が近づくに連れ、足取りが重くなる。

別に息が上がっているわけではない。

なんだろう。

正直に思った。

自分に嘘をつかず、いたら嫌だなと。

公園のベンチが見えるか見えないかの境界で僕は立ち止まった。

目を凝らす。

夜という自らの視覚センサーが弱くなる状況でも確認しなければならない。

じいーっと見つめる。

いるようないないような、よくわからない。

ふと思う、あっ僕どうみても公園を物色する不審者だ。

職質をされてみたいと思ったことはある。

思ったことがあるだけで、実際にされるのはゴメンだ。

僕は意を決して公園に入る。

すぐに分かった。

彼女はベンチにいる。

しかも昨日と同じ位置だ。

位置までわかる、つまり昨日もここにいたことが確信へと変わる。

近づく、ジャリジャリと小石を踏みしめる音が下からする。

足音が聞こえるにもかかわらず、彼女は振り向かない。

覚えている、覚えている。

昨日もそうだった。

その不気味さが今日も今まさに体全身で感じる。

怖い。

とても怖い。

ああああああああ、怖い。

僕はベンチの横に立つ。

でも彼女は振り向かない。

彼女はベンチに座っている。

腰が据わっている。

それでいて肝が据わっているのか。

いや、覚悟が据わっているというべきか。

そんな言葉遊びが脳のプロセッシングの一部を使っていた。

その瞬間、彼女はこちらを向いた。
昨日と同じ顔、同じ表情、同じ姿勢、同じ雰囲気。
すごくドキドキする。
なんだろう。
「・・・あ、あの、」無意識に言葉が、

後ろにぐんっと引っ張られる。
え、・・・。
ここまで昨日と同じかよ。

目が覚めた。
布団の中にいた。
僕は顔と腕を出した。

顔が歪む、体温を含んだ息が出る。
右腕を勢い良く布団に叩きつける。

「なんなんだ、もう！！」

我慢できなかった。

これは単に構文の違いということだけでなく、私たちが世界中に共通する一定数の概念をもっていて、言葉はそれぞれ既存の概念に《名づけ》をするものではないことを意味しています。

言葉は、それが話されている社会にのみに共通な、経験固有の概念化・構造化であって、外国語を学ぶということは、すでに知っている事物や概念の新しい名前を知ることではなく、今までとは全く異なった分析やカテゴリー化の新しい視点を獲得することにほかなりません。

(丸山圭三郎著 言葉とは何か より)

今日は、授業も午前中で終わったしお昼からゆっくりすることにした。

いつも、ゆっくりだらだらしている気がしないでもない。

ただ、このまま自己言及を続けると自己嫌悪の可能性があるのですぐさま止めた。

お昼ごはんを軽く済ませ、すぐさまベッドに横になった。

いけないとは思いつつも勢い良くベッドにダイブする。

そして、昨晚のことを思い出した。

あの女性にコンタクトを取ろうとすると、まるでゲームオーバーのごとく次に目覚める場所はベッドだ。

そうだ、昼間の内にあの公園に行ってみよう。

寝てるよりはマシだろう。

それに、昼間ならあの女性がいなくなることがなぜか確信にも似た感覚でわかる。

いつもの公園へと続く坂道を上る。

公園とあのベンチが見えてきた。

昼間ということもあり、はっきりとわかる、ベンチには誰もいない。

公園の金属のゲートをくぐり公園の中に入る。

誰もいなかった、子どもも遊んでいない。

まだ、肌寒いからだろうか、いやわからないけれど。

僕はベンチに座った。

突き抜けるほどの青空が広がっている。

僕は蒼穹が好きだ。

青空をみて、嫌な気持ちになる人を少なくとも僕は知らない。

美しさや綺麗さなど、美の基準は国やまたは時代によって違うことが普通だ。

でも青空だけは、特別だと思う。

まだ、人類が洞窟から這い出てきて文明もなにもなかったときも。

何かを解決する手段が暴力しかなかった悲しい時代のときも。

彼氏がソワソワしながら彼女を待っているような時代が変わっても変わらぬ恋模様のときも。

青空はいつもそこにあり続けたし、これからもそうなのだろう。

だから、僕は青空が好きだ。

「いい詩ね。」透明感のある、聞き覚えがあるというかつい最近聞いたばかりの声が聞こえた。

びっくりして声の聞こえた方を向く。

すぐ横にあの女性がちょこんとあたかも最初から座ってましたと言わんばかりの自然な感じで座っていた。

っていうか、近かった。

恋仲の男女のような物理的距離だ、コレは。

「一気に心拍数があがってる。」彼女はまた呟く。

「え、あの、その、何で。」もう自分で何を言っているのか言っていないのかわからない。たじろいで、思わず座りながら後ずさる。

「私はね、星空が好き、満天の星が降り注ぎそうなほどのね。」彼女は僕の間を見ながら話した。

あまりにも、真っ直ぐで綺麗な瞳が僕を見る。

なんだろう、この感じすごくドキドキするのに、すごく安心する。

本来同居するはずのない二つの感覚が矛盾なくそこに居座っていた。

僕は人と目を合わせることが極端に苦手だったけれど、彼女とならそれが出来た。

姿勢を直して、僕は喋った。なるべく自然な感じで、そして不快にさせないことを一番に考えて。

「だから、夜、このベンチで星空を眺めていたの？」

「少し違う。綺麗な星空を眺めたい思っていたから、待っていたの。」

少し変化球の答えが返って来た。

僕は何を待っていたのか聞こうとして、口を開けようとした瞬間。

彼女は、真っ直ぐな瞳で続けてこう言った。

「・・・君を。」

【注意書きとお願い】

- この小説は、実際の個人、団体、集団いずれにも該当するものでもありません。
- 日本語が非常に怪しいところがあります、ご容赦ください。
- 前触れもなく、内容の変更、設定の変更などが起こることがあります。
- 変更した際は、 タイトルのVer.の数字が変わります。
- 挿絵を描いて頂ける方、募集中です。twitter (ID:azure_kuko) にお知らせ頂けると嬉しいです。
- 絵の上手い下手は問いません。挿絵があると良いかなあっと思っただけのことです。